

中 里 遺 跡

— 東日本最大・最古級の弥生集落 —



小田原市教育委員会

例言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今号は
第12号として、小田原市中里に所在する中里遺跡（小田原市№14遺跡）を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成28年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いま
した。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。
（敬称略・順不同）
戸田哲也・相原俊夫・河合英夫（株式会社玉川文化財研究所）、諏訪間順・鈴木一史（小田原市経済部観光課）、
田代吉宏（小田原市立鴨宮中学校）、近藤康司（堺市教育委員会）、小宮真一郎
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課土屋健作が担当者となり、同課大島慎一・内田文明・山口剛志・高橋
泰幸・相川直史・渡辺千尋・飯山智久・下澤亜裕美・土屋了介・三戸芽・鈴木理子が補佐し、図版の作成は太
田麻紗美、復元図の製作は市毛秀人が担当しました。地図上の挿絵は、小田原市立鴨宮中学校美術部石垣愛
海・中山咲優姫・矢田瑠海さんに製作して頂きました。



第1図 遺跡周辺位置図 (1/25,000)

〔表紙〕 中里遺跡航空写真（北から）（撮影：株式会社玉川文化財研究所）

〔裏表紙〕中里遺跡第Ⅰ地点出土資料

I 中里遺跡の出現と稲作文化の到来

1 ^{なかざと} 中里遺跡の立地と環境

中里遺跡は、足柄平野の中央を流れる酒匂川左岸の鴨宮面と呼ばれる標高約10mの段丘面上に立地しています。遺跡が立地する微高地は、中里の地に弥生人がムラを築く約400年前に発生した、富士山東斜面の崩壊によって生じた大規模な土砂なだれ「御殿場泥流」によって形成されました。足柄平野の大部分を泥流が覆う大災害が発生して数百年の歳月が過ぎ、酒匂川の下流域は土砂の堆積が進み、支流が入り組み複雑な微地形を形成し始めた頃、中里の地に本格的な稲作技術を持つ集団が現れました。中里遺跡は、東日本への弥生文化の伝播を考える上で大変重要な遺跡です。



写真1 中里遺跡の遠景

2 中里遺跡の発掘

中里遺跡は、昭和27年（1952）に毛織物工場を建設中に土器が出土したことで存在が確認され、南関東地方のなかでも比較的古い時期の弥生時代の遺跡として認識されていました。その後、90年代から工場敷地の再開発事業に伴う発掘調査が実施され、合計4万㎡を超える発掘調査により東日本最大規模の弥生時代のムラであることが判明しました。

なかでも平成10年に実施した第Ⅰ地点の発掘調査では、弥生時代の竪穴住居跡が102軒確認されました。広場の中央には大型の掘立柱建物跡が建ち、井戸をもち、集落の外周を河道が廻る様子が確認されるなど、これまでの東日本における弥生時代像を大きく変える集落の様子が明らかとなりました。また、出土した土器の中には、西日本で製作された土器が複数含まれていたことから、弥生文化の伝播に関わる重要な発見として、発掘調査の成



写真2
読売新聞 中里遺跡発見の報道
平成10年11月7日朝刊



写真3 中里遺跡第Ⅰ地点の調査風景

果は新聞等で大きく報道されました（写真2）。平成10年11月に実施した遺跡見学会では1万2千人を超える見学者が訪れ、世間の注目を集めました。

第Ⅰ地点の南東側に位置する川東タウンセンターマロニエを建設する際に発掘された第Ⅲ地点では、弥生時代の墓が数多く発見されました。また、集落域の東側に位置する第Ⅱ地点や、現在の小田原東郵便局に位置する矢代遺跡からは、水田跡とみられる木杭列が発見されました。土壌からは稲作が行われていたことを示すプラントオパールが検出されています。第Ⅰ地点で集落跡、第Ⅲ地点で墓域、第Ⅱ地点で水田跡に関連する遺構が発見されたことにより、弥生時代集落の全容が明らかになりました。また、遺跡の周囲において小規模な本格調査や試掘調査を実施しており、集落の広がりが徐々に明らかになってきています（第2図、表2）。

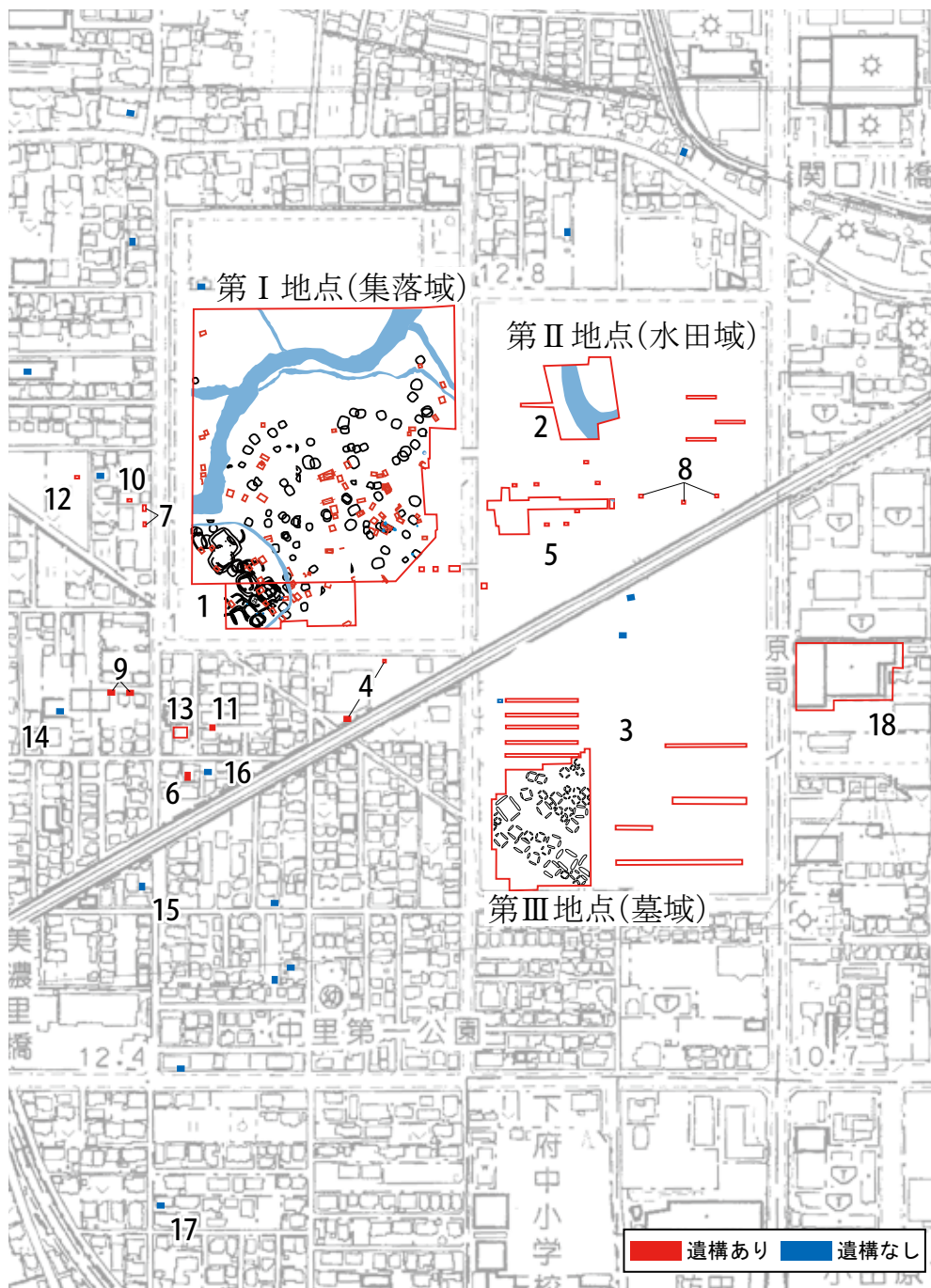
また、小田原市では第Ⅰ地点の発見以降、中里遺跡をテーマにした講演会や展示会を実施しており、平成12年11月には「中里遺跡講演会」として調査速報を発信し、平成24年2月に開催した「シンポジウム 弥生ムラの出現とその背景」では、弥生時代の研究者によって中里遺跡の重要性について議論が行われました。

その後、平成26年9月に第Ⅰ地点の発掘調査報告書が刊行されたことを記念して、平成28年12月に最新出土品展「発掘された中里遺跡」を開催し、出土遺物の展示と調査担当者による講演を行いました。

第Ⅰ地点の発掘調査報告書が刊行されたことにより、今後は中里遺跡の評価がより多方面から行われ、資料が活用されることが期待されます。

本誌では、これまでの発掘調査やシンポジウム等で明らかになった中里遺跡について紹介します。

略年代	a	前400		前300		前200		前100		1	100		200		250							
	b	前300		前200		前100					1	100	200									
時代	時期区分	弥生時代前期				弥生時代中期				弥生時代後期				古墳時代								
		Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ										
		後半		前半		中葉		後葉		初頭		後半				末						
主な土器型式		矢頭		堂山		三ヶ木		平沢		中里		宮ノ台		久ヶ原		弥生町		前野町		〔東京湾〕		
														朝光寺原						〔鶴見川上流〕		
														(相模)						(相模湾)		
小田原の遺跡		府川諏訪の前		前川山王前		府川諏訪の前		中里		香沼屋敷跡		久野山神下		久野多古境		国府津三ツ俣		羽根尾塚ノ上				



第2図 中里遺跡の発掘調査地点

No.	遺跡名・調査内容		所在	調査年月日	検出遺構	出土遺物
1	中里遺跡第Ⅰ地点	試 本	中里字角田208	1998.01.07～03.04 第1期：1998.03.16 ～1999.03.24 第2期：1999.06.21 ～09.16 第3期：2000.03.02 ～03.09	弥生中期：竪穴住居跡102・掘立柱建物跡73・柱穴列2・小竪穴状遺構9・井戸6・土坑832・区画溝2・溝状遺構5・ビット・旧河道跡2、弥生後期～古墳前期：平地式建物跡26・掘立柱建物跡13・井戸5・土坑21・環壕1・溝状遺構13	弥生中期：土器・石器・石製品・木製品・炭化米・種子類・獣骨類、弥生後期～古墳前期：土器、土師器、石器、獸骨等、古墳後期：須恵器
2	中里遺跡第Ⅱ地点	本	中里字角田208外	1991.07.18～10.15	弥生：旧河道・畦畔杭列	
3	中里遺跡第Ⅲ地点	試 本	中里字角田273-6・296-9	1991.11.08～1992.03.14 1992.04.27～10.30	弥生～古墳：溝状遺構 弥生中期：方形周溝墓46、弥生後期：方形周溝墓3、弥生後期～古墳前期：掘立柱建物跡3・土坑4、古墳：溝状遺構2	弥生～古墳：土器 弥生中期：土器、弥生後期～古墳前期：土器、古墳：土器・石器
4	中里遺跡第Ⅳ地点	試	中里字角田270-1外	1999.06.29・07.01	弥生中期：住居跡1、弥生～古墳前期：溝1・柱穴5、近世以降：溝1	弥生中期：土器、古墳：土師器
5	中里遺跡第Ⅴ地点	試 本	中里字矢代322-2	2001.11.26～12.18 2002.02.18～04.12	弥生中期：竪穴状遺構・土坑・溝 弥生中期：土坑50・溝状遺構3・ビット群1・旧河道1	弥生中期：土器 弥生中期：土器・石器
6	中里遺跡第Ⅵ地点	試	中里字順礼道北191-5	2000.08.09	不明：溝状遺構1	弥生中期：土器、近世：磁器
7	中里遺跡第Ⅶ地点	試	中里字家ノ前77-1	2001.11.30～12.03	弥生中期：土坑1	弥生中期：土器、古墳：土師器、近世：磁器
8	中里遺跡第Ⅷ地点	試	中里字矢代313-9	2001.12.03～12.11	弥生？：河道1・土坑（井戸）1・杭列1	弥生？：杭、奈良・平安：土師器
9	中里遺跡第Ⅸ地点	試	中里字桜屋104-6	1999.07.05	古墳：溝状遺構1	不明：土師器
10	中里遺跡第Ⅹ地点	試	中里字家ノ前77-1	2002.10.17	古墳前期：溝状遺構1・土坑2・ビット1	弥生中期：土器
11	中里遺跡第Ⅺ地点	試	中里字順礼道北208-8	2003.07.09	弥生中期：土坑1	弥生中期：土器、近世：陶器
12	中里遺跡第Ⅻ地点	試	中里字家ノ前80-1外	2006.01.10	弥生：溝1・土坑3・柱穴2	弥生：土器
13	中里遺跡第ⅫⅢ地点	試 本	中里字順礼道北202-3	2012.09.07 2012.10.29～11.16	弥生：土坑 弥生中期：竪穴住居跡1、弥生後期～古墳前期：平地式建物跡1、平安：住居跡1、不明：土坑6	弥生：土器 弥生：土器、平安：土師器・須恵器
14	試掘調査	試	中里字桜屋107-1	2003.11.18	なし	近世：陶器
15	試掘調査	試	中里字桜屋122-10外	2008.02.07	なし	不明：土師器・磁器
16	試掘調査	試	中里字順礼道北192-2	2011.10.28	なし	弥生：土器、近現代：磁器
17	試掘調査	試	中里字茶泉畑146-3	2014.05.02	なし	古墳：土師器
18	矢代遺跡	本	前川字矢代14-1ほか	1999.04.02～08.31	弥生中期～古墳前期：畦畔・杭列4・溝状遺構1・噴砂（礫）・断面11、古代～中世：旧自然流路1・溝状遺構18・土坑2、近世以降：旧自然流路2・溝状遺構1・土坑2・足跡（田面）1	弥生中期～古墳前期：土器・土師器・木製品（杭・板材）、古代～中世：土師器・須恵器・陶磁器・かわらけ・金属製品（銭貨・不明青銅製品）、近世以降：陶磁器・金属製品（煙管・銭貨・不明鉄製品）

表2 発掘調査地点一覧

Ⅱ 河道に画された大集落

1 第Ⅰ地点で発見された大集落跡

集落跡の発掘調査となった第Ⅰ地点（約3万平方メートル）からは、竪穴住居跡102軒、掘立柱建物跡73棟、土坑822基、井戸跡6基などが発見されました（写真4）。集落は河道などで囲われており、集落域の中央付近には竪穴住居跡のない広場とみられる空間があり、大型の掘立柱建物跡が確認されました。第Ⅰ地点は、集落の約半分を発掘調査していると見込まれることから、ムラ全体では200軒近い規模になる可能性があります。

中里遺跡のムラは約100年続いていたものと考えられており、遺跡としてはその間の痕跡が積み重なったものになります。このため、住居跡は一度に200軒が存在した訳ではなく、建て替えなどが繰り返されることで残された痕跡とみられています。

弥生時代の竪穴住居跡は、角が丸い長方形であり、4本の柱穴が見られるのが一般



写真4 第Ⅰ地点全景（写真上が北）

的です（写真5）。中央付近には火を焚いた炉跡がみられます。住居跡は、長軸が5～6m程の規模をもつものが多いなか、集落域の中央広場近くからは、一辺が8mを越える規模をもつ住居跡も発見されています。この巨大な住居跡は、ムラにとって特別な建物であった可能性があります。



写真5 竪穴住居跡

また、竪穴住居跡のなかには、火災で焼失したとみられるものが確認されています（写真6）。焼失住居跡からは、炭化した建築材が放射状に倒れた状態で出土しており、建物の構造を知ることができます。また、炭化した材を樹種同定分析にかけたところコナラ・ヒノキ・スギなどの木材が使用されていることが分かりました。



写真6 焼失した竪穴住居跡

2 中央広場の^{どくりつむなもちばしらたてものあと}独立棟持柱建物跡

集落跡の中央付近には、竪穴住居跡が見られない広場のような空間があり、柱間が2間×7間の大型掘立柱建物跡が発見されました（写真7）。この建物跡は、高床式で切妻造の建築物とみられ、桁行（長軸）9.2m、梁行（単軸）4.2mの規模を持ちます。掘立柱建物跡とは、一般的には倉庫としてイメージされる建物ですが、集落の中央広



写真7 独立棟持柱建物の柱穴列



写真8 池上曾根遺跡(大阪府)の復元例(個人撮影)

場に立地していること、規模が大きいこと、棟持柱が外側に出る特異な構造である点から、ムラの集会所などの特殊な機能をもつ建物跡であるとみられます。同様の独立棟持柱建物跡は、大阪府和泉市に所在する池上曾根遺跡でも確認されており、写真8のように上屋が復元されています。

3 ムラを囲う河道

ムラの北側には、北東方向に向かって河が流れており、ムラを隔する役割を担ったものと考えられます（写真11）。河道は幅15m、深さ1m程の規模で蛇行しており、第Ⅱ地点と第Ⅴ地点においても確認されることから、集落域の北側を囲うように流れていたことが分かりました。現況の標高などから、河道は第Ⅴ地点の東端からは南東方向に向かって第Ⅱ地点（墓域）の東を流れていたと想定されます。他の遺跡では、集落域と墓域の間を溝などで隔する様子がみられますが、中里遺跡でも蛇行する河道と人工の溝などで空間を隔てていた可能性が考えられます。



写真9 植物繊維加工品の出土状況



写真10 シカ下顎骨出土状況



写真11 河道跡

河道の集落側の岸には、土器片や石器が多量に出土しており、ゴミ捨て場であったとみられています。河道の埋没土は水に浸かった状態が保たれていたため、植物繊維や木器類が腐らずに出土しました（写真9）。このほかに、シカやイノシシ骨など食物残滓も見つかっています（写真10）。貝塚など特殊な条件下でなければ残らない有機物が出土した河道の調査は、当時の多様な生活を知る重要な発見となりました。

4 井戸の出現

ムラの中心部分から井戸跡が6箇所発見されました。写真12の1号井戸は、径が約2.3m、深さが約1mの規模があります。それほど深くありませんが、河道の深度と比べれば十分な湧き水が得られたものと思われます。井戸の中からはたくさんの石が出土しており、石を使って水を濾過していたと考えられます。日本列島における井戸の出現は弥生時代からであり、東日本の当時期では初の検出例となりました。井戸の出現は、灌漑技術の伝播とともに革新的な出来事と評価されます。



第3図 井戸跡の分布



写真12 1号井戸跡

5 在地の中里式土器

住居跡などの遺構の中からは、弥生時代中期中葉の土器が多量に出土しています。この時期の土器は、壺形土器と甕形土器を主体として、少量の鉢形土器がみられます。壺形土器は、首が細長く、上半分を沈線と縄文や刺突文を組み合わせた幾何学文様で飾ることが特徴的です。これらは、神奈川県西部の地域的な特徴を有することから中里式とも呼ばれています。



写真13 在地の中里式土器



写真14 東部瀬戸内系土器

6 外来系土器の出土

在地の中里式土器に伴って、遠隔地から持ち込まれた土器が複数出土していることも特徴です。特に東部瀬戸内地方の土器は全体の3パーセント強を占めており、他には伊勢湾や中部高地、北陸地方、北関東地方、南東北地方の土器も出土しています。遠隔地の土器は、形や模様だけでなく粘土も在地とは異なることから、遠隔地で作られたものが中里の地に持ち込まれたものとみられます。

土器以外にも、畿内で産出するサヌカイト製の石剣（写真18）や石鏃が出土するなど、遠隔地との関係を示す遺物が出土しています。これらの品は、稲作技術などとともに中里の地にもたらされたものと考えられます。



写真15 伊勢湾系土器



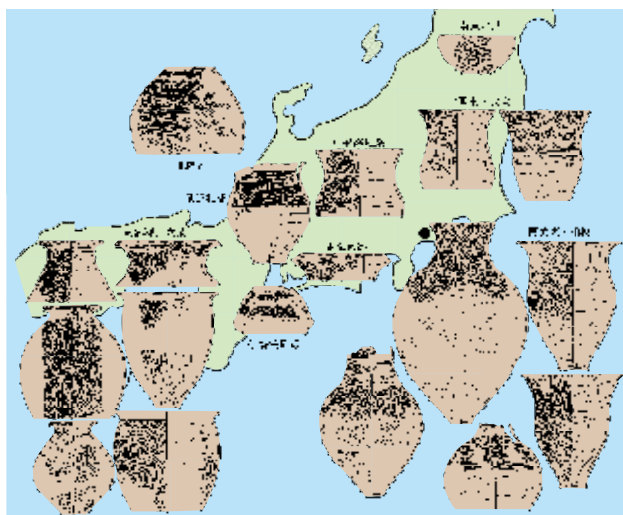
写真16 尾張北部系土器



写真17 北関東系土器



写真18 サヌカイト製の石剣



第4図 中里遺跡に持ち込まれた遠隔地の土器

7 農耕具の出土

遺跡からは、畑作や稲作の活動痕跡を示す遺物が出土しています。写真19は、全長43.7cmと非常に大型の石鋤で、地元の酒匂川水系で産出される輝石安山岩を素材として作られています。石鋤は、小田原城下香沼屋敷遺跡で確認された中里期の竪穴住居跡からも出土しており、農耕具と考えられています。

河道跡からは、木製の鋤も出土しています（写真21）。柄の長さは76.5cmで、約65度の角度で身を装着しています。樹種同定分析の結果、身はコナラ属アカガシ亜属、柄はサカキで作られていることが分かりました。

この他にも、伐採具とみられる^{ふとがたはまぐりばせき}太形蛤刃石斧や、木材加工のノミの様な機能が想定される^{えぐりいりちゅうじょうかたばせき}抉入柱状片刃石斧や^{へんぺいかたばせき}扁平片刃石斧などが見つかっています（写真20）。これらの石器は、稲作技術とともに日本列島に流入した大陸系磨製石器と呼ばれています。



写真19 石鋤



写真20 大陸系磨製石器



写真21 木製鋤

8 ゆうぜん どくろ 有髭土偶の出土

中里遺跡からは、土偶が1点出土しています（写真22）。出土した土偶は、人面の顎から頬にかけての破片で、細い線で髭の様な表現がみられます。弥生時代の土偶は数が少ないのですが、近隣では大井町の中屋敷遺跡から、弥生時代前期の土偶形容器が出土しています（写真23）。

土偶に表現される髭や入墨などの風貌は、祭や呪術などの場における弥生人の姿を現しているものとみられます。

土偶は縄文時代の象徴的な道具の一つですが、東日本では弥生時代に入ってもわずかに出土します（第5図）。これまでの道具に、新たに土偶形容器を加え、祈りの場などで用いられていたものとみられます。



写真22 中里遺跡出土の有髭土偶



写真23 大井町中屋敷遺跡出土の土偶形容器



第5図 有髭土偶の変遷

設楽博巳 2003「続縄文文化と弥生文化の相互交流」
『国立歴史民俗博物館研究報告』108 を一部改変

中里遺跡周辺散策マップ



Ⅲ 祖先を祀る方形周溝墓群

1 第Ⅲ地点から発見された方形周溝墓群

居住域の南東側に位置する第Ⅲ地点からは、46基の方形周溝墓が並ぶ墓域が確認されました。方形周溝墓とは、埋葬施設の四方に溝を掘って方形に区画した形態の墓です（写真25）。埋葬施設は、溝を掘って墳丘状に盛り上げた上に築かれるため、墳丘が失われた現在ではほとんど残っていません。本来であれば方形区画の中央付近に遺体と副葬品を納める楕円形の穴が掘られていたものとみられます。墓の規模は、長軸で4m～17m台まで大きさに開きがあります。これらの規模や配置の違いを、世帯や階層差の表れとみる研究もあります。方形周溝墓は、弥生時代中期後半から一般化する墓制であり、中里遺跡で確認された墓域は、その初現的な様相とみられます。

写真24の様に、方形周溝墓の軸向きは多少異なりますが、溝同士はほとんど重なり



写真24 墓域全景(第Ⅲ地点)

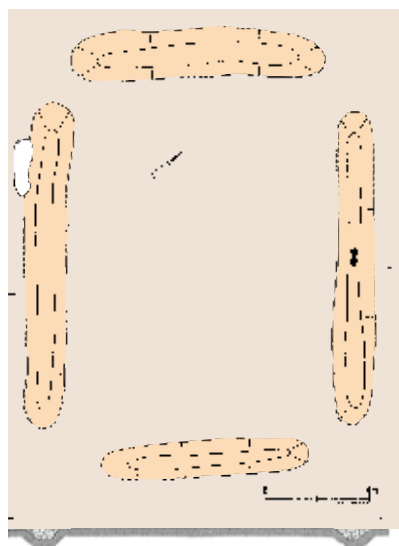
ません。このことから、お墓を新たに造る際は、先祖のお墓を崩すことなく隣接して造営した様子が分かります。当時は小高い墳丘が点々としており、墓域として一定の管理がなされていたものと考えられます。

第6図の40号方形周溝墓は、中里遺跡で最も規模が大きく、長軸17.2m、短軸13.4mを測ります。40号方形周溝墓の溝からは、中里遺跡で最大の壺が出土しました。壺は高さが71.6cmで、胴部の最大径は48.5cmあります。出土状況から、壺は溝の中に埋納されたものとみられます。

集落域と墓域を分ける遺跡は、県内では横浜市の大塚・歳勝土遺跡で確認されています。中里遺跡の時代よりやや新しくなりますが、集落域を環濠で囲い、集落域の外に方形周溝墓が群集して造られています。中里遺跡においても、集落域の南東部に墓域としての空間が形成されていたものと考えられます。



写真25 35号方形周溝墓



40号方形周溝墓



第6図 40号方形周溝墓から出土した大型壺

Ⅳ ムラの外に広がる水田域

1 第Ⅱ地点から発見された木杭列

集落域の東側に位置する第Ⅱ地点では、河道に隣接して木杭列が発見されました。中里遺跡では、明確な水田跡の発見には至っていませんが、微高地に形成された集落の周囲には、稲作に適した環境が広がっていたものとみられます。第Ⅱ地点で確認された木杭列は、河道から取り入れた水を水田域に流すなどの役割を担っていたものと考えられます。また、集落内からは、鍬や鋤などの木製農耕具や石器が複数出土しており、土壌からはイネ科のプラントオパールやヒョウタンの種（写真28・29）が検出されることから、稲作や他の植物の栽培が行われていたことが分かります。

第Ⅰ地点の334号土坑からは、炭化米が多量に出土しており、現代の米よりやや小ぶりのジャポニカ種の特徴を有していることが分かりました（写真27）。

イネ科の他に、ヨシやススキのプラントオパールも検出されていることから、集落の周囲は水田や葦原が広がっていた環境であったと考えられます。



写真26 第Ⅱ地点で発見された木杭列



写真27 炭化米



写真28 イネ科のプラントオパール



写真29 ヒョウタンの種



稲作イメージ図(鴨宮中美術部作成)

中里遺跡の風景

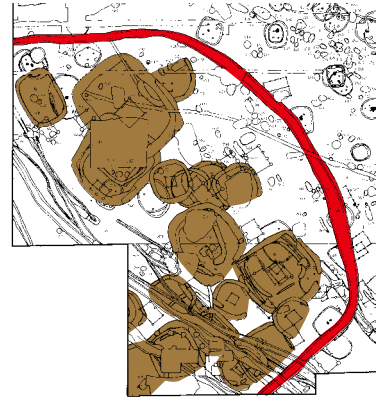


V 後期の環濠集落

1 弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡

第Ⅰ地点の南西角からは、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての環濠集落跡が見つかりました。大規模な集落が展開した中里期から約200年が経過した時代の集落跡です。ムラは、外縁部を人工の溝である環濠によって画されています。西側が調査区外のため、集落の規模は不明ですが、環濠内からは当時期の住居跡が26軒発見されました。

住居跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての壺や甕が出土しました（写真32）。

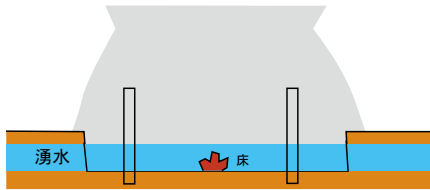


第7図 平面図

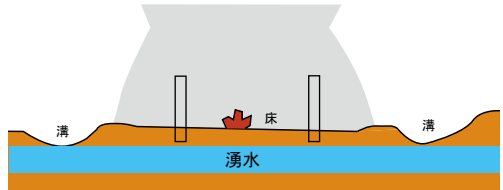


写真30 環濠集落跡全景

竪穴式住居跡



平地式住居跡



第8図 平地式住居の構造

住居跡は、いずれも床面は掘りくぼめずに造る「平地式住居跡」と呼ばれる構造であることが特徴です。平地式住居跡は静岡県の登呂遺跡でも確認されており、地面を掘り込まずに土間を築くため、湿地帯など水が湧く環境で用いられた建物と考えられています。

湿地帯でありながらも、集落を築き、生活を営んだ中里遺跡での暮らしは、古墳時代前期を最後に見られなくなります。代わりに、中里遺跡から東方に位置し森戸川の河口に形成された国府津三ツ俣遺跡や、北方の高田・千代・永塚の台地上に居住の場が移っていったものとみられます。

中里の地から集落が移った後も、古代から近世にかけて永く稲作地帯として土地利用が続き、現在の田園や町並みにも水田区画に影響を受けた条里地割りの面影を残しているとみられます。



写真31 平地式住居跡



写真32 環濠集落より出土した土器

用語解説

・中里式土器

弥生時代中期中葉の紀元前250年頃に使用された土器です。沈線と縄文によって描かれる文様が特徴です。相模地域に広がりが見られます。第Ⅲ地点の40号方形周溝墓からは、高さ71.6 cmの壺が出土しており、最大の中里式土器です。

・環濠集落跡

人工的な溝等によって囲われたムラを環濠集落と呼びます。ムラを溝で囲う理由は、ムラ同士の争いの際の防御施設と考える説と、単に住空間を隔するための溝と考える説等があります。

・平地式住居跡

地面を掘くほめて床面とする竪穴住居に対して、掘りくほめないで地面を床面とする住居を指します。低地など水気を含む土壤に住居を築く際に選択された方法と考えられています。

・方形周溝墓

弥生時代から古墳時代にかけて造られた、四方に溝をめぐらした方形の墳丘をもつ墓です。被葬者は、墳丘中央の穴に、副葬品とともに埋葬されていたと考えられます。

・独立棟持柱建物跡

高床の構造を持つとされる掘立柱建物のなかでも、短辺の柱穴が外に出ているものを呼びます。屋根が寄棟構造で、外に飛び出た柱で棟持柱を支える構造であったと考えられています。

・条里

古代から中世にかけての規則的な土地区画のことで、条里地割りによって土地を表示することができるようになり、道路整備等、計画的な開発が可能となりました。

文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。中里遺跡をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- | | |
|--------|---|
| 戸田哲也ほか | 2015『中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所 |
| 呉地英夫ほか | 1997『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市教育委員会 |
| 高村公之ほか | 2000『矢代遺跡』財団法人 かながわ考古学財団 |
| 大島慎一編 | 2000『平成12年小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会』小田原市教育委員会 |
| 渡辺千尋編 | 2012『弥生ムラの出現とその背景 記録集』小田原市教育委員会 |
| 土屋了介 | 2013「中里遺跡第ⅩⅢ地点」『平成25年小田原市遺跡調査発表会』小田原市教育委員会 |
| 河合英夫 | 2016「関東地方における本格的な弥生文化の幕開け」『平成28年小田原市遺跡調査発表会』小田原市教育委員会 |
| 諏訪間順編 | 2014『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流』平成26年度小田原城天守閣特別展、小田原城天守閣 |

小田原の遺跡探訪シリーズ12

中里遺跡

—東日本最大・最古級の弥生集落—

平成29年3月21日 印刷

平成29年3月24日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 有限会社 石橋印刷

